エッセイ
『魏志』倭人伝の西域論

SCE・Net　鹿子島達志

E-179

発行日
2025年9月30日

1．虺龍文鏡(きりゅうもんきょう)の奇跡

奈良市の富雄丸山古墳（4世紀後半）出土の虺龍文鏡と同タイプの青銅鏡が、遠く離れた姉妹都市の**ウズベキスタン・サマルカンド市**からも出土していた。この奇跡を親善に生かすため、奈良市は**2027年**に奈良国立博物館で開催予定の**「奈良・サマルカンド特別交流展」**で2鏡を展示すると発表した。虺龍文鏡は中国・**前漢・新時代(紀元前1世紀末～紀元後1世紀初め)**の制作とされる。富雄丸山古墳品は**直径19.1cm**であるが**通常は10cm前後**で、国内にある虺龍文鏡40面のうち最大となる。古墳から出土することは異例で、大型虺龍文鏡の出土事例は日本では**福岡県平原1号墓(2-3世紀)**出土鏡、16.5cm**国宝**(紀元前1世紀末)の１面しかない。一方、**サマルカンドのコクテパ墳墓**（紀元前1世紀）出土の虺龍文鏡も、**直径18.7cm**の大型鏡であり、ウズベキスタンの国宝級という。

中国の前漢時代（紀元前1世紀ごろ）に武帝が張騫(ちょうけん)を西域に派遣し、これにより、中国と中央・西アジアとの交易網が開拓され、後に「シルクロード」となった。サマルカンドの虺龍文鏡は、紀元前1世紀頃の東西交流の証左であり、富雄丸山古墳の鏡の由来が、注目される。

図-1：両出土虺龍文鏡の写真　　図-2：平原の鏡　　図-3：「特別交流展」のポスター

図-1(左)富雄丸山古墳の虺龍文鏡(奈良市教育委員会提供)、(右)サマルカンド市のコクテパ墳墓の虺龍文鏡(ウズベキスタン共和国芸術文化振興財団提供) 図-2 伊都国歴史博物館　図-3ポスターは奈良市公表のもの

2．『魏志倭人伝』西域記述の謎

『魏志倭人伝』は、陳寿(233年-297年)が著した『三国志』中の「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷伝・倭人伝の略称である。「邪馬台国」や「卑弥呼」でよく知られ、当時の倭国の詳細な記述がある。ところが、倭人伝の末尾に西域の記述が、突然現れる。しかも、倭人伝より精密な内容となっている。倭人伝が2641字に対し、補足の筈の西域分が3224字である。残念なことに、西域伝は殆ど知られてなく、専門家でさえも、関心がない様であるが、内容は以下の様に多岐にわたっている。

1)．陳寿の史評。「史書の記述は事実に応じるもので、常に一定の形式ではない」という趣旨。

2)．魏略西戎伝引用（氐人・賓虜など西戎の詳細な民族誌）

3)．燉煌から西域へ至る交通路の叙述、大月氏・安息・天竺（身毒）などに属する国々

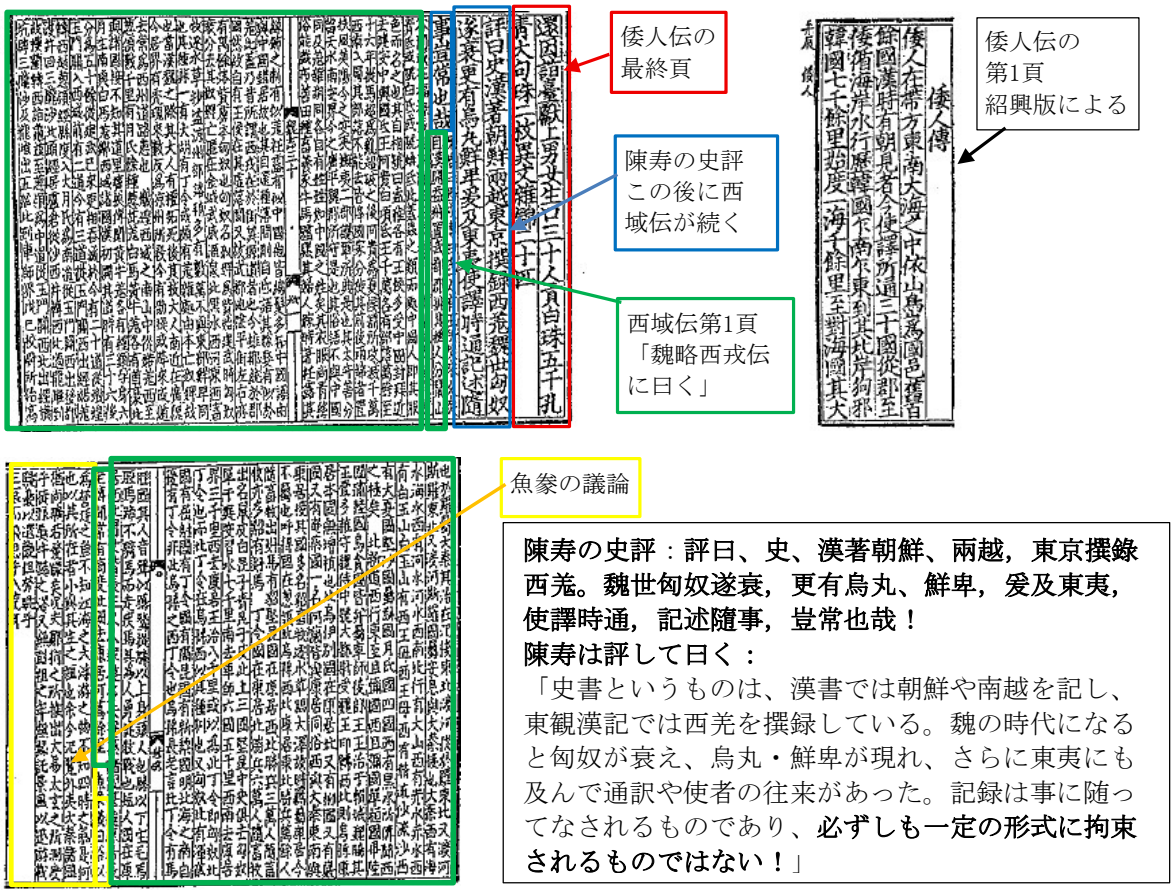
4)．インド（天竺）・仏教の伝来、　　5)．大秦国（ローマ帝国）の記述

6)．大秦属国（沢散王・驢分王・且蘭王など）、7)．北方西域の国々

8)．魚豢の議論（締めくくり）「小国の人は世界の大を知らず」

なお和訳は「中國哲學書電子化計劃 https://ctext.org/text.pl?node=603372&if=gb」に依った。

図-4：魏志倭人伝）紹興版 影印



陳寿が、東夷伝・倭人伝の末尾にわざわざ西域伝を挿入した不可思議な謎を、単なる紀行文としてではなく、思想・歴史・文明論的に読み解く考察が、本エッセイのテーマである。

（1）陳寿の姿勢

陳寿の執筆姿勢は、上記の「史評」に表れている。つまり、「『三国志』では、記述の仕方は事実に随っており、前史たる『史記』『漢書』に対し、夷蛮伝の立て方が異なる。事実を重んじ、その事実に対応して体裁を変えたのだ。だからこの変更は当然である。どうしてそれは形式事であろうか。いや、そうではない！」というのが真意である。（参考：『邪馬壹国の論理』（ミネルヴァ書房）古田武彦および、『『魏志』東夷伝への一構想』（大和書房）孫栄健 に同じ趣旨の記載がある）。これは、前例を貴ぶ史家の立場としては、自主的であり、甚だ異例のことでもある。

（2）西域伝記述の意図

さて、魏志の成立時点には、張騫の西域報告（紀元前2世紀）から すでに400年近くの隔たりがあり、情勢は大きく変化していた。ではなぜ、時代遅れとも見える西域・ローマの描写を、あえて魏志に書き加えたのか？陳寿はあえて倭国の地理記述の後にこれを置き、文明の東端

（倭）と西端（大秦）を対置することで、ユーラシア的文明空間の全体性を表現したのであろう。しかし、本当に伝えたかったのは、単なる空間的記録ではなく「東にも、西にも、学ぶべきものや見るべき世界はある。自らの目でその世界を見よ」という警世である。それゆえ、魏志の西域記述は「文明論の結び」として、倭人伝の後に置かれたと考える。一方、彼は「蜀」の生まれで魏・晋の前は蜀の官僚でもあった。蜀は西域や南蛮に近い。実際に蜀は、それらの他方を従えている。陳寿が後に仕えた晋朝は、その始祖である**司馬懿**が、**公孫淵**を滅ぼして東方へ版図を拡大し、勢力拡大に繋げて魏朝を簒奪した。『魏志東夷伝・倭人伝』はその成果とも言える。なお、『三国志』に西域伝・南蛮伝はない。司馬懿の宿敵であった蜀に関係した西域・南蛮を避け、司馬懿の功績に繋がる東夷伝のみを記述した。しかし、後世の読者（史家）に「古い記録だが、西域伝を敢えてここに書く意味がある。よく考えよ！」と「評」を残した。さらに、陳寿は「西域伝」の最後に『魏略』を表した**魚豢(ぎょかん)**の議論である「営廷の魚は江海を知らず、浮遊の物は四時を知らず」を引用した。小さな世界に閉じこもる宮廷の知識人の限界と視野の狭さが指摘されている。即ち『「遠きを知ること」こそが文明理解の本質であり、見聞の狭さは知的怠慢に他ならない』であり、陳寿が言いたかったことである。『三国志』は名史書として継承され来た。以上が、**「西域伝記述の謎」**への私の解答である。

表-1は、中国正史の履歴。※後漢書は後漢(25年-220年)を記すが、制作時期は新しい。

表-1：参考：関連史書一覧

史書名	編者	年代	内容
『史記』〈大宛列伝〉	司馬遷	前 92-89 年	張騫の大宛訪問を含む最古の西域記述
『漢書』〈張騫列伝〉	班固	111 年	張騫の第一回・第二回の出使を詳細に記述
『後漢書』〈西域伝〉	范曄	432 年頃	漢と西域諸国の交流史、班超の活躍も含む
『魏志』〈西域伝〉	陳寿（引用多）	280 年頃	漢代の記録と、魏代の伝聞を合わせた内容
『晋書』西域諸国列伝	房玄齢	648 年	張騫以降の記録を整理し直す時代
『魏書』西域伝	魏収	554/559 年	タリム盆地諸国との間に使節往来再開
『隋書』列伝 第 83「西域」	魏徴	636/656 年	西域再編と交通網の整備が進む
『旧唐書』『新唐書』「西域伝」	劉昫/欧陽脩	945/1060 年	西域経略の完成。節度使設置・安西都護府

・前漢・武帝期：**張騫**の西域探検、月氏・大夏・身毒情報を報告、前139年 / 前119年。
・後漢：ローマとの交流（西域経営に当たる西域都護の**班超**が**甘英を**安息まで派遣）97年。

▶ **表-2：参考：大秦（ローマ帝国）の記載　※表-2は、大まかでもローマの情報を把握している。**

項目	魏志の描写	ローマ帝国との一致
地理	安息のさらに西、大海の向こう	ローマはパルティアの西。地中海を越えた感覚は近い
都市国家	城邑 400 余・三大都・五宮	地中海沿岸に多数の属州都市があった
制度	王は選挙制・災異で交代・合議	ローマにおける皇帝制・元老院とは一致せず（理想化？）
人民	胡服、背が高く、賢人を王に選ぶ	西洋人との外見差はあるが、儒教的理想が投影されている
物産	金銀・宝石・珍獣・織物・香料	ローマは東方交易品を多く輸入し、シリアなどで再輸出
書記制度	胡書を用い、駅伝制度あり	ローマ文字とは異なる。駅伝制度はローマにも類似の制度

（3）魏時代に西域交流が断絶した理由

魏志が「西域との交信は絶えた」と記す背景には、以下の複合的要因があったと考える。

・クシャーナ朝衰退後の西域国家群の分裂、・匈奴・鮮卑・羯など騎馬民族の東西交通路支配

・魏・晋王朝の政治的混乱と国内優先政策、・甘英以後、正式使節派遣の停止

・安息・大秦への使節は通じず、以降、情報は断絶した

これにより、陳寿は西域を“かつて存在した文明世界”として記録するしかなかった。

それでも彼は、魚豢の言葉を借りて「世界を知ろうとする精神」の重要性を訴えたのである。

３．中国の「一帯一路」政策と、西域伝の比較

一帯一路政策とは、2013年に中国の習近平国家主席が打ち出した経済圏構想であり、世界の131ケ国が参加している。陸路は、中央アジア経由で中国とヨーロッパを結ぶシルクロードを指す。甸龍文鏡の**ウズベキスタン**も含め、表-3は、西域伝の国々が、現在の国々に相当していることを示す。

▶ **表-3：参考：西域伝に記載された主な地域**

漢字表記	発音	現代の比定地	備考
大秦	Rome/Da Qin	ローマ帝国全域（特に東部）	シリア～地中海東岸を中心
驢分	Lvfen	アラビア湾岸部またはオマーン沿岸？	安谷に近く、海上経路の要衝
燉煌	Dunhuang	中国 甘粛省 敦煌市	西域入口の要衝、玉門関あり
烏孫	Wusun	天山山脈北部、イリ地方（カザフスタン）	馬の産地、遊牧王国
康居	Kangju	シルダリア川流域（ウズベキスタン）	シル川流域の草原国家
身毒	Shendu	インダス下流域（パキスタン南部～西インド）	前漢の張騫が報告、前２世紀には既知
大夏	Daxia	バクトリア（アフガニスタン北部）	月氏に征服され「大月氏」となる
安息	Anxi	大秦への海路の中継パルティア Parthia	大秦との緩衝地帯、交易制限国
月氏	Yuezhi	ウズベキスタン～アフガニスタン	後に大夏を征服、大月氏に
天竺	Tianzhu	インド亜大陸全域（特に北インド）	「インド」の音写、古代仏教中心地
車離国	Cheli	タイ北部～ラオス北部説	象を使った戦闘が特徴
盤越国	Panyue	ベトナム北部～雲南説	益部（蜀）と関係あり

次表の表-4は、一帯一路政策に関連して、西域伝に記述された各国・地方の戦力資源や生活品などが現代の何に相当するか対応させて、古代のサプライ・チェーン構想が現在にも通じることを示している。

▶ **表-4：参考：魏志西域伝 物産の現代的カテゴリーの表**

カテゴリー	当時の具体例（魏志記事）	意味・用途	現代に相当するもの
戦略資源	馬（烏孫・康居・堅昆）、鉄・銅・錫（大秦）、毛皮（奄蔡・丁令）	軍事力・寒冷地対応・武器製造	石油・天然ガス、レアメタル、軍需産業資源
贅沢品・ブランド品	絹（中国）、胡綾（大秦再織）、海西布、金銀細工、珊瑚・真珠・夜光珠、琥珀・玉石	王侯貴族の権威・交易の象徴	高級ブランド品、宝飾品、ファッション、デザイン産業
必需品・生活品	穀物（龜茲・焉耆）、家畜（牛・羊・駱駝）、布（氐人の織布）、香料（天竺：白檀・蘇合香）	食料・衣服・生活文化	食品、日用品、エネルギー（香料は当時は医療・宗教必需品）
宗教・文化資源	仏典・仏像・黄衣（天竺）、音楽舞踊（龜茲）	信仰・文化交流の核	ソフトパワー（映画・音楽・宗教・教育）
希少・象徴的資源	九色玉石、大秦の奇獣（駮鶏犀・神亀）、馬脛国や短人国の伝説	権威づけ、珍奇収集	宇宙探査成果、希少鉱石、パンダ外交・観光資源

なお、この一帯一路政策には、シルクロードの西端の西域伝に記載の大秦(ローマ)のイタリアも、東端の東夷伝・倭人伝に記載された倭(日本)も参加していない。一帯一路政策について、陳寿や魚豢はどのような感想を述べるだろうか？政略や経済だけの交流は、彼らの賛同を得ないであろう。

以上